

〈講 演〉

新大陸発見500年記念を迎えるに当って

林 屋 永 吉(前スペイン大使)

私は、中南米の諸国やスペインの各地をまわっております間に、色んなことに関心を持って参りましたが、最初の留学の時から退官までずっと興味を失わず本を読みつづけて参りましたのが、このコロンブスのことでございます。今回、スペインに在勤しておりました間もコロンブス関係の人たちや研究者達と色々話をして参ったわけでございますが、スペインでは、目下新大陸発見一箇密にいうと、コロンブスがこの時に発見したのは新大陸ではありませんが、まあ慣例に従い、そのまま新大陸と呼ばせて頂きます—500年記念の年を7年後の1992年に迎えるということで、大変活発に準備をすすめておりました。所謂スペイン的と申しますと、大体その2・3年前になって、慌てて「そら大変だ！準備しよう。」というのが、普通なんでございましょうが、この500年祭に関しては、決してそんなことはなく、まだ7年も、8年もありますのに、はやばやと新大陸発見500年記念委員会ができて、記念行事の一環として各種の出版物が出始めております。コロンブスの第一回航海日誌とか、いろんな cronista のもののファクシミリなども、どんどん出ております。また、最大のイベントとしては Sevilla において万博を開催することが既に決定しました。これは Chicago とかなり争い双方譲りませんで、Chicago と Sevilla の両方で開くということに決定しましたところ、最近 Chicago が辞退しましたので結局 Sevilla だけとなりました。そんな訳で、Sevilla も非常に張切ってその準備をしております。

これに加えて、Barcelona では韓国のソールの次のオリンピックを同

市に持って来ようと立候補いたしております。パリと競合しておりますので、なかなか難しい戦となりますが、それが実現しますと、1992年には、コロンブス及び新大陸との交流にゆかりの深かった Sevilla において万博が、そして、コロンブスが帰って初めて国王に謁見を賜わる Barcelona においてオリンピックが開かれるということで、非常に画期的なことになろうかと思う次第でございます。

このようにスペインが500年祭にかける意気込みは非常に大きいものでございますが、それは何と申しましても、この新大陸発見が世界史に対するスペインのもっとも誇るべき最大の貢献である、という認識がベースにある訳でございます。その他にも、やはり内乱後40年を経過し、政治、経済もようやく安定し、フランコ体制からも脱皮して民主化の道をたどり、いまや君主制下に社会主義政権が誕生し、新生スペインが近代化の道を歩み出しているということを世界に誇示したいという点も見逃せないかと思います。しかもこの新生スペインは86年1月からECに加盟することが決定しておりますが、ヨーロッパの Comunidad の一員としてスペインが認められたこの際に、中南米との強い紐帯を顕示したい、そしてスペインこそ中南米とヨーロッパのかけ橋的な役割を果す立場にあるんだということを示したいという気持ちもあろうかと思う次第でございます。

ところがスペインがこのように意気込んでいますところへ実は水をかけるような形で反対の声があがって参りました。反対の声というとちょっと大袈裟ではございますが、実はメキシコの学者の間から descubrimiento を celebrar するというのはおかしい、descubrimiento とは何んだ、もともとおれたちはおったんで、たまたまコロンブスが来たにすぎないんだ、これは arribo de Colón,あるいは llegada de Colón a nuestra tierra というべきものである、われわれは、はるか昔から存在しているのに descubrimiento と言われることはなかるうというわけであります。

ところで descubrimiento という言葉は Academia の辞典によりますと、
“hallazgo, encuentro, manifestación de lo que estaba oculto o secreto, o

era desconocido” となっておりますから、その言葉の意味からいって descubrimiento という言葉を使うことは、そうおかしくないと私は思うんです。又、日本語でも「発見」というのは、広辞苑には「まだ知られていなかったものを初めて見つけ出すこと」となっております。中南米がその頃まだ知られなかった所であったことは事実なんだし、*estaba desconocido* であったことも事実なんで、「発見」という言葉を使うのにそれほどこだわることはなかろうと思うのでございますが、メキシコの人達の考え方はそうではない。先般この4月にメキシコに参りまして León Portlilla さんなんかと、この話をしておりますと、彼は「一単語の解釈の問題ではない。その主体が誰かということであり、またこの単語の後にある意味が問題なのであって、この言葉を使うことにはどうしても納得できないんだ。我々にとってスペイン人の到来は descubrimiento ではなく invasión なんだ、そしてそれは、我々の文化の destrucción であったのだ。だから、われわれはこれを celebrar するなんてことはとんでもない。これを conmemorar するのならまだ分るが」などといいます。そして、「descubrimiento という言葉を使う限り、500年祭にメキシコが協力することはあり得ない。これは単なる一個人の感情的意見ではなく、メキシコ人なら誰でも同じ考えを持っているんだ」とまでいっているのであります。こういうことは誰か一人が言い出すと、そうではないとは仲々言いにくいもので、結局メキシコ中にそんな空気がいっぱいになってしまい、去年の7月の9日から12日まで Santo Domingo で開かれました Primera Reunión de Comisiones Nacionales de Descubrimiento de América というものには、descubrimiento という名前が付せられる限りメキシコから参加できないという非常に強い立場が出され、Primera Reunión de Comisiones Nacionales Conmemorativas del Encuentro de Dos Mundos と並列させようという話もありましたが、結局 Primera Reunión de Comisiones Nacionales Conmemorativas de Quinto Centenario de doce de octubre de 1492 という形になったわけでありまして、またこれから先どういうことになるか分かりませんが、こういうことをメキシコが言い出しましても、ラテンア

リカの中でもアルゼンチンのような国は全然関心を示さない。ペルーの人も、「どちらでもよいと思うが、メキシコがそう言うなら仕方がない」などと言う。はっきりメキシコに同調するのはやはりグアテマラとかパラグアイとかボリビアで、そういう国は、その通りだ、その通りだと言いますが、それも別に本気で反対しているわけではない。いわんや 500 年記念にソップを向くということはない。どういう形で呼ぶとしても、結局メキシコも含めて中南米の各国で 500 年の記念行事が盛大に催されることになろうかと存じます。

そこで、この 500 年祭なんです、それでは一体今まで 400 年祭だとか 300 年祭だとか 200 年祭だとかはどういうふうにかかれてきたのかと、ちょっと調べてみますと、勿論 1592 年には 100 年祭というようなものは開かれておりません。誰もそんなことは思い出していない。200 年祭も同様ですし、300 年祭というのも全然ありません。初めて記念式典とか祝賀会が開かれたのは実は 400 年祭であります。中南米は 100 年のときも 200 年のときも 300 年のときもスペインの植民地でございますから、本国でそうした行事が行われねば、植民地でも何かをやろうとは考えない。従って、コロンブスの銅像を立てようというようなことも 400 年祭まではどこにもない訳でございます。400 年祭に際してこれを祝おうとまず呼びかけたのは、いうまでもなくスペインでございます。当時スペインでは 400 年祭を重要視し、これを *Fiesta de la Familia Hispana* というか、中南米の同族意識を盛り立てて連帯感を強める機会にしよう、非常に政治的に考えるわけです。ちょうど第一次共和制が終わった後です。王制復古がなり *Alfonso 12* 世が復位するのが 1875 年で、その治世は 1902 年まで続きますが、1892 年はこの *Alfonso 12* 世のもと *María Cristina* の摂政時代となります。この頃になると失われた植民地に対するノスタルジーがスペインの国民の間におこってくる。そして国内では保守主義と自由主義の抗争といったことはありましたが、*Carlista* 戦争も終り若干国内政治が落ち着いてくる。そして植民地が独立してから 70 年ぐらいたっている。既に 1836 年には結局スペインも新しく独立した中南米諸国を承認するわけでございますが、失われた植民地に対する紐帯を確認したいという気持ち

が、この頃になるとスペインの中で起こってまいります。独立した国々に対する母国といえますか、Madre Patriaの意識がまさしくこの400年祭を契機とするかのようにスペインに起こるわけでございます。血と言語と宗教によってつながっているという、よくいい古されたことでございますが、そうした新大陸との紐帯を更に強めようという考えが強まってくる。

一方その頃には、アメリカがスペインの勢力を新大陸から払しょくしようとして活動する。そしてその野望は1898年の米西戦争で達成されるわけでございますが、19世紀の中頃から一段とスペインの逆宣伝を行う、所謂皆さん、ご承知のleyenda negraでございます。ラテン民族というのはbárbarosであって、アングロサクソンだけが優秀なんだ。スペインが中南米でやってきたことはこんなことなんだ、という悪例をいくつもあげて逆宣伝をする。実際は悪いことも勿論あったわけですが、positiveな面もあったのに、それには全く言及しないで、異常なほどの反スペイン・キャンペーンが米英、特にアメリカの手によって行われたわけです。

そういう状況でもありますからこの機会にもっとしっかりやらなければいかんという訳でもあったのでしょう。このCuarto Centenarioに対してスペインは大変な意気込みを示したんですが、スペインというのは不思議な国で、こうした官製のお祭りというのはなかなか盛んにならない。Fallaであるとか、SevillaのFeriaとか、ああいう祭は町中一体となってひっくりかえるような大騒ぎをいたしますけれど、こうした政府が準備したものに対しては余り反応を示さない。従って400年祭というのも、政府の意気込みのわりにはあまりパッとしないで、せいぜい各町々で講演会が開かれたり一応の行事があった程度で、むしろ在マドリッドの中南米の大使館の方が盛大にお祝いをしたようです。特にマドリッドで盛大な祝賀パーティーをやったのは実はメキシコの大使館だったようです。マドリッドだけではありません。新大陸の諸国も含めて400年祭を最も盛大に祝ったのはメキシコであったということでございます。

その頃のメキシコというのは、御承知のように1877年以降Porfirio Díaz

の独裁下にあります。それが 1911 年まで続くのですが、この時代は今のメキシコ人から言わせますと非常に忌むしい、唾棄すべき時代であったんでしょうけれども、実は平和と秩序と繁栄の時代であり、貴族趣味の欧化時代、いうならば鹿鳴館時代のようなものです。彼らは当時はヨーロッパ文化以外のものは文化でないと考えている時代です。教会の勢力も非常に強くなっている時代です。1890 年代というのは科学主義者、científicos と呼ばれている人たちが現れて、白人優位を説き、indio とか mestizo なんてものは汚らわしいきたないものであるといていた時代で、今のメキシコでは考えられない雰囲気かびまんしておった訳です。独裁者ディアスという人ももともとは indio の血を受けた人で、最初は mestizo 階級を大切にしたんですが、夫人が欧米崇拝者だったようですっかり欧米かぶれになってしまいました。400 年祭に当ってはこの大統領が先頭に立って、全国的に大変な催しが行われます。メキシコの主要な町は全部装飾され、花火をあげ、行列があり、つぎつぎといろんな催しが開かれます。コロンブスの銅像の除幕も Plaza de Buena Vista で大統領臨席の下に行われます。数年前にも一つのコロンブスの銅像が立てられていましたから、これは二つめでしたが、これをメイン・イベントとして記念行事が華々しく行われます。大司教によるミサには大統領をはじめ全閣僚が出席いたしますし、工場も商店も全部休業ということで、独立記念日よりもよっぽど盛んな記念式典が行われました。その当時の新聞にはコロンブスのことを “iniciador y padre de la cultura americana” と呼んでいるものもあり、又、次のような今では想像もつかない言葉もございます。“Merced a su prestigioso descubrimiento, gozamos de los beneficios de la civilización a la que él abrió las puertas del nuevo mundo.”

このようにコロンブス賞讃の言葉というか、あるいは自分たちのメキシコの文化がいかにかヨーロッパ文化を基調としているかということ強調することが、何の抵抗もなく受け入れられていた時代でございます。この時代を象徴するものとしては、モーニングコートを着てシルクハット姿というのがよく図版などに載っておりますが、ちょっと余談になりますけれど、大分前にエ

チェペリア大統領が日本に参りました時、モーニングを着用して飛行機から降りるかどうか問題になったことがあります。エチエペリア大統領はどうしてもモーニング姿で降りるのはいやだとがんばって、この頃こそ天皇陛下が飛行機まで国賓をお迎えにいかれることはありませんが、その頃は元首が来られると飛行機の下まで陛下がモーニング姿で迎えに行かれる。そうすると、国賓の方もモーニングで降りて頂かないと格好が着かない。しかしエチエペリアは、「それだけは堪忍してくれ。メキシコのテレビに私がモーニング姿で映ることは、どうしても困るんだ。」ということでしたが、その理由は、モーニングを着ていると国民はディアス時代を思い出すからだということでした。ディアスの時代というのはつまり、贅沢な貴族趣味の、庶民から遊離した社会にすぐつながるようでございます。私は決して400年祭の時のメキシコの官民の対応を賞讃するわけでは毛頭ございませんが、400年の時に一番さわいだメキシコで500年祭に対する反対が起こっているということは極めて興味深いことだと思います。

そこで、一体我々にとって *Quinto Centenario* というのはどんな意味合を持っているのだろうかということなんですが、勿論400年祭の時は日本は全然そんなことがあったことも何も知りません。1892年といえば、明治25年、日清戦争の時です。丁度今テレビの「春の波濤」で川上音二郎がたたかれる万朝報が刊行された年でございます。コロンブスのことなど誰も関心がありません。もっとも1868年にはハワイ移民が出ており、1888年にはメキシコとの平等条約が初めて結ばれておりますから、国民が海外へ目を向け始めた時代ではあった訳ですが、コロンブスだとかその400年祭なんてことは、日本と全く関係ないものであった訳です。

しかしながら、それから100年経過した500年祭も400年祭と同じように無関心で居られるか、我々として放っておいてよいかということになりますと、答は矢張りそうあってはならないということではないかと考えます。即ち日本としてはスペインの大事業と賞讃するいわゆる *españolismo* にも偏せず、又メキシコの *indigenismo* にもかぶれない、即ちどちらにも偏らない、

日本から見た 10 月 12 日の記念というのがあっていいのではないかと考える次第であります。

と申しますのは、まずコロンブスに対する評価でございます。コロンブスは我々日本人としては新大陸、Indias を発見した、あるいは最初にこの地域に到達した人という当然の位置付け以上の意味があると思います。それはやはり彼が西洋から西まわりで東洋へ行くことを決行した、最初のヨーロッパ人であったということであろうかと思ひます。コロンブスは新大陸を発見するために航海に出たわけではない。中世の物語に出てくるような島々を捜しに行ったのでもない。何か見つかるだろうと思って、ただ未知の世界へ冒険旅行をしようと船出したわけでもない。彼は西洋から西まわりで東洋へ行くことが可能であることを十分承知の上でこれを決行しようということ考えたということに、私は非常に大きな意味があると思ひます。西の方へ航海すれば東洋へ着くであろうということは、当時は地球が丸いということが既にわかっておりますから、当然想像はついておったことなんです。彼はそれを非常に近い距離に計算する。極めて簡単にいうと、この地球の円周を 20,400 millas (イタリア milla では 1 milla が 1500 m ぐらいです) と考え、そのうちの暗黒の海は 7 分の 1 だ。従ってこの海によってへだたっている欧州とアジアの間は約 3,000 millas という計算をする訳であります。実際は 1 万 millas もございますから大変な誤算ではあるのですが、彼はともかくそこへ行こうと船出したわけで、そこに私は非常に大きな意味があると思ひます。

次に、この東洋へ行こうという決心をするに当っては、日本を非常に意識している。日本を捜しに行つたと言へば、話としてはおもしろいですが、別に日本ばかりを目指した訳ではないにしても、東洋の中に日本があり、それが西洋から一番近い所にあるということを知り、日本を非常に意識していたということだけは確かだと思います。

このことは、10 月 12 日にグアナハニ島へ着いたあくる日の 10 月 13 日の日記にもよく出ております。つまり、36 日間にわたる困難な航海の末に最初

の陸地を発見する。そしてグアナハニ島に着く。そこで珍しい風物や indio 達を見たことをそのあくる日の日記にいろいろ詳しく書いていますが、その後には、「この島には彼らが鼻にぶらさげている黄金も産出しますが、私はここに暇どっていないで、ともかく Chipangu の島に到着できるかどうか行ってみたいと考えております。」とはっきり記しております。10月12日に新しい島へ到着して興奮も未だ冷めやらぬ時に、本来ならここで数日間停まっておっても不思議でないのに、その翌日に早々と船出をして日本を捜しに行きたいと彼が言っていることは、非常に興味深いことだと考えます。彼はさらに航海を続けまして、次に Cuba (Corba)の様子を聞いてこれこそは日本に違いないと思う訳です。10月21日の日記には、「この島は彼らの手まねから察するに Chipangu に違いないと考えます。この島には船もあれば、非常に立派な船乗りも大勢いるということでもあります。」と記し、21・23・24・26日の4日間に亘って Chipangu という名を日記にとどめております。「これは Chipangu に違いない。」「この島については、幾多のすばらしいことが伝えられており、私の見た地球儀や世界地図絵にも、このあたりにこの島が印されているのであります。」「この島の大きさや金や真珠のことを語ったことから、この島こそが、すなわち Chipangu だと考えます。」等々であります。Cuba に着くのは28日ですが、その数日前は、彼の頭が日本でいっぱいだったと言っても少しも間違いないと思います。こうして4日間にわたりシパング、シパングと言っておるわけですが、そこで、Cuba に到着し、2人の部手を奥地へ派遣して見にやらせてみると、どうやら Cuba はシパングではないということがわかる。どうも方向が違ったらしいということがわかると直ちに南下します。そして11月に入り、6日にハイチ島に着きます。ここで、Cibao という地方の名を聞き、これこそシパングだと考えます。11月24日の日記には、「彼らは黄金の産地の名をあげて、シパングの話をした。彼らはその地をシバオと呼んでいたが、そこでは非常に多量の黄金が産し、その酋長は金でうって作ったのぼりを持っている。」とのべ日本に対する非常な関心を示しておる訳でございます。

以上のような次第ですので、私はコロンブスが東洋に向かって西の海へ初めて船出をした人であるのみならず、日本に対して並々ならぬ関心を持っておったということを我々は忘れないで、彼が最初に陸地についた日をスペイン及び米州諸国の人々と共に conmemorar するなり celebrar しても良いと思うのでございます。

ところで、一体、コロンブスが日本に関心を持ちはじめたのは、いつなんだろうか、といえますと、ポルトガルにいるのが、1477年から1485年の中頃迄で、その間、1484年末には João 2世に初めて、航海事業を提案し却下されている訳ですから、航海を計画するのは1484年前であることは確かです。1484年のポルトガル王への提案の内容は、長南さんが訳しておられる“Las Casas”の“Historia de las indias”にもでてきますが、そこに既にシパングの名前が出てきますから、その時にはもうシパングの名は彼の頭の中にあつたわけです。それは、マルコ・ポーロの東方見聞録を読んで、考えついたんだといえます(私も簡単に言う時には、そう言っておりますけれども)が、ちょっと正確ではない。現在 Sevilla にある、コロンブス図書館に所蔵されているマルコ・ポーロの東方見聞録は、アントワープで出版されたもので、Francisco de Pino de Boronia が、ラテン語に翻訳したのですが、実はこの版が1485年なんです。すると、1484年に、João 2世に提案している時にはコロンブスがこれを読んでいたとはいえない。この本には340何か所にわたってコロンブスが書きこみをしておりますから彼が読んだことは確かなんですが、ポルトガル王に航海を提案する以前に読んだという訳にはいかない。それじゃ、マルコ・ポーロの東方見聞録に影響されたというのは誤りかというところ、そうではない。それは彼がポルトガル滞在中にトスカネリーというフィレンツェの人から手紙をもらった、その手紙の中に、マルコ・ポーロの名前こそメンションしてはありますが、マルコ・ポーロの東方見聞録の内容とほとんど同じことが、書いてあります。このトスカネリーとコロンブスの文通については異論もありますが、現在ではイタリアの学者もスペインの学者も、史実として、認めておりますから信頼してよいと思っておりますが、この文

通によって、トスカネリーが、マルコ・ポーロの伝えたことを初めてコロンブスに教えるわけです。コロンブスは友人を介してこの著名な学者に手紙を出し、西へ航海することについての考を質します。するとトスカネリーから、実はポルトガルの王様からも同じことを聞いてきて、こういう手紙を出したからといって、その写しを送っています。その写しの内容というのが、ほとんどマルコ・ポーロの東方見聞録に書いてあることと同じです。ですから、おそらく、コロンブスはこのトスカネリーからの手紙を読み、その話の元はマルコ・ポーロという人の本であることをどういう経路でからか知り、スペインに行ってから入手したその本を読んでもますます自信を固めたというのがまあ正確なところではないかと思えます。

これによりますと、リスボンから、キサイの町までが、6,500 millas、アンティリャからシパングまでは2,500 millasと書いてあります。シパングを随分東よりに位置づけている訳ですが、トスカネリーの手紙には、さらに「シパング島は金銀、その他の宝石類がすこぶる豊富で、寺院や王宮の屋根は純金でふかれています。その島へ行く道は人々に知られていないので、上記の様々な事物は隠されたままです。」とあります。私は案外この隠されたままでも知らないということが可成りコロンブスを引きつけたのじゃないかなどと、考えておりますが、いずれにしても王様が、金銀で屋根をふいた宮殿に住んでいるんだということに、大変な魅力を感じたことは間違いないと思えます。

まあこんなこともありますから、是非とも500年記念は *conmemorar* でも、*celebrar* でもよいから何らかの形で日本でも盛大にやるべきだと思う次第です。

それを理由づける、全く異った観点からのもう一つの理由がございます。それはこの500年祭は21世紀に向ってのラテンアメリカ諸国と日本との関係を強化するのに、非常にいい機会ではないかと思えます。

どうも最近政府の重点の置き場所も、ややもすれば中近東、あるいはアメリカの方が先になってラテンアメリカがその後にくるような気がいたしま

す。経済協力を見てみましても ODA の無償援助の額は大体 7 割がアジアで、あと 3 割が 1 割ずつアフリカと中近東と中南米に分配されるということになっているようですが、最近アフリカの方がだんだん増えて、中南米の方が減っているような感じです。今更皆さんに申し上げるまでもなく、中南米には何ととっても 100 万近い日系人がおります。これは、他の大陸にはないことです。アフリカも中近東も日本にとって、重要ですが、骨肉を分けた同胞が 100 万近くもいるということは、大きなファクターです。私にとって非常に印象的だったことはボリビアにおります時に、無償援助で病院がいくつか建設されましたが、その三ッ目の病院の落成式の時に在留邦人の古老が、これで私達も肩身が広い、今迄はヨーロッパの国々やアメリカがこの国のために色々するのに日本は何もしていなかったのが、ここ数年間の内に日本は随分協力するようになった、おかげでこの国の人々の我々を見る目が違ってきました、ほんとうにありがとうございます、といて感謝されたことがあります。私はこれをきいて経済協力は在留邦人が肩身の広い生活のできるためにも役立っているのかと感じたことがございます。こういう意味からも私は中南米をもっともっと重要視してゆかなければならないと存じます。最近はい、中南米と日本の経済関係が非常に深くなっております。投資額でも日本は、西独について 3 位になっておりますし、中南米の対外輸出先をとりあげますと、アメリカについて第二位、日本がドイツよりも多くなっております。従って債権も米について大きいわけですが、ODA となりますと、日本はまだまだ低い、アメリカの 6 億 3000 万ドル、西独の 2 億 8,400 万、オランダの 2 億 6,000 万、フランスの 1 億 8,000 万につづいて日本の 1 億 8,000 万となります。これでも随分がんばってきたわけですが、アメリカの 6 億 3,000 万は別としても西独の半分くらいというのは、一寸恥しい話です。

私はこの 500 年祭の機会に中南米を、日本の政界、官界、財界がもう一度、見直して、その関係を緊密化する機会にして欲しいと考える次第でございます。こういう意味合からも日本としては、日本なりの 500 年記念祭行事をそろそろ考えて行くべきではなかろうかと存じます。